研究ノート

*Readings in Japanese Language and Linguistics*の概要
── 専門日本語教育の階梯 ──

Outline of *Readings in Japanese Language and Linguistics*
― A First Step to Academic Japanese Teaching ―

藤　原　雅　憲
Masanori FUJIWARA

１．はじめに

表題の書物（以下，本書）に出会ったのは2003年のことである。当時筆者は，国際交流基金から日本研究専門家としてインドネシア・バンドゥン市にある国立パジャジャラン大学大学院に派遣されていた。その折，同大学のナンダン・ラフマット教授（博士）に紹介を受けてバンドゥン外国語大学を訪問する機会を得た。その大学の図書館を見学した際，館長から日本コーナーを案内していただいた。コーナーの大半は見覚えのある日本語教育関係書だったが，見たことのないＡ４版型の，表紙が英字で書かれた書物を発見した。表紙の下部には「Ann Arbor: the University of Michigan Press」と記されていた。

その時，以前からご厚誼を賜っていた南山大学の加藤俊一教授の言葉を思い出した。加藤教授は南山大学赴任前，長らくミシガン大学言語学科で教鞭を執っておられた。その時代を思い出しながら教授は，ミシガン大には日本語教育関係の書籍や教材，文書が多く残されており，それを日本に持ち帰っているので，いつか公表したいと語っておられたのである。

筆者は，目の前の書物がその中の１つに違いないと思い，図書館長に全ページのコピーを依頼した。しかしながらその複製は帰国後，長らく研究室の書棚に放置したままだった。その後，Bernard Blochに関する研究指導に従事したり，ハーバート・パッシン著『米陸軍日本語学校』の文庫本化や，武田珂代子著『太平洋戦争日本語諜報戦』の出版などがあった。それらを通して改めて，本書の編者であるJ. Yamagiwaの活動に注目するようになった。

そこで，金城学院大学図書館の蔵書を検索したところ，本書とともに注釈本が所蔵されていることがわかった。本書がPart Iで，注釈本がPart IIであった。それらは中級段階を終えた日本語学習者のために作成された，日本語及び国語学を目指す専門日本語の入門書であることを知った。つまり，辞典や国語学の専門書の中から選定された，全部もしくは一部の文章（以下，文章）を収録したのがPart Iであり，それらの文章に注釈を施した

のがPart IIなのだった。出版の1965年以降，一部の日本語教員や日本語学習者しか手に取ることのなかった本書と注釈本の概略を明らかにすることを目的とし，加藤教授の念願の１つを実現したいと考えて本論を執筆した。

２．本書のあらまし

本書のタイトルは表題の通りである。その他の情報を以下に示す。

副題：Part I selections
編者：Joseph K. Yamagiwa
文章の選定者：Hiroshi Tsukishima
出版社：The University of Michigan Press
出版年：1965
登録番号：Library of Congress Catalog No. 65-13047
組み方：縦組み，右開き（editor's forewordは英文のため横組み）
目次：
序文（editor' foreword）
本書収録論文等（字体は本書による）

⑴　時枝誠記「国語學」，『國語學辭典』
⑵　中田祝夫・築島裕「國語史」，『國語學辞典』
⑶　池上禎造「国語学史」，『国語学辞典』
⑷　橋本進吉「國語音韻の變遷」，『國語音韻の研究』
⑸　有坂秀世「古代日本語に於ける音節結合の法則」，『國語音韻史の研究増補新版』
⑹　龜井孝「上代和音の舌内撥音尾と脣内撥音尾」，『國語と國文學』
⑺　金田一春彦「東西両アクセントの違いが出来るまで」，『文學』
⑻　時枝誠記「言語の存在條件としての主體場面及び素材」，『國語學原論』
⑼　橋本進吉「文と語と文節」，『國語法研究』
⑽　水谷静夫「形容動詞辨」，『國語と國文學』
⑾　石垣謙二「作用性用言反撥の法則」，『助詞の歴史的研究』
⑿　松尾捨治郎「終止形所屬の非詠嘆論」，『國語法論攷』
⒀　大野晋「假名遣い起原について」，『國語と國文学』
⒁　上田萬年・橋本進吉「我が國の辭書と節用集」中の「古本節用集の研究」，『東京帝国大學文科大學紀要』
⒂　築島裕「訓読史上の図書寮本類集聚名義抄」，『國語学』
⒃　春日政治「國語資料としての訓點の位置」，『古訓點の研究』
⒄　金兒祝夫・中田祝夫「元興寺法相宗明詮大僧都の點本に就いて」，『國語國文』
⒅　湯澤幸吉郎「國語資料としての抄物」，『國語と國文』
⒆　東條操「方言と方言学」，『日本方言学』
⒇　国立国語研究所「５か村の言語はいかに違うか」，『八丈島の言語調査』
(21)　土井忠生「吉利支丹の日本語研究」，『吉利支丹語學の研究』
(22)　時枝誠記「國語問題に對する國語学の立場」，『國語と國文学』

以上が本書に関する情報である。次に本書の作成目的と作成経緯を序文（editor's foreword）から明らかにする。英文の要旨を日本語で述べる。

本書は，全５巻からなるシリーズの１つです。日本語を学ぶ学生にさまざまな文章を複製して提示し，併せてアメリカの学生に役立つ注釈を豊富に提供して，現代日本の優れた学術に接してもらうことを目的としています。このシリーズはそれぞれ，日本語，日本文学，日本史，政治学，社会学を扱っています。各巻ともに学術論文や学術雑誌からの抜粋ですが，中には記事全文を掲載したものも

あります。

注意したのは，それぞれの学術領域の下位分野をもれなく拾い上げることでした。本書の読者は，収録された文章が各分野の広範で多様なものであることに気づかれることと思います。従いまして，提示したすべての文章が個々の学生やクラスに向けられることを意図したのではなく，自身の関心に合った文章を選んで学習してほしいと思います。そうすれば，これらの文章を学習することで，専門用語や研究の潮流に触れることができて，さらに深く進み入って得るものが大きいと考えています。一方，自身の関心を広げて文章を読んでいけば，日本語能力が伸長し，理解力が高まっていくことになります。

それぞれの文章が導いている結論が学界に広く受け入れられているとは限らず，また，多くのものが疑問の余地がないわけではないけれども，そこに示された解決への試みは，学生に対してどの研究手法に従うのが有効かを示していますし，学生一人一人の研究にヒントを与えてくれることと思います。

本書は，よく整備された大学の日本語プログラムで２～３年の訓練を受けた学習者を想定しています。このような学習者であれば，日本語教員とともに学んでも，当該分野の専門家と学んでも，また独習でも，本書付属の注釈本を参考に学習することができ，現代日本の学術への洞察力を養うことができます。

筆者は，本書が採択した文章の著者と，本書の出版社に感謝を申し上げます。著者のご許可と出版社のご理解は，太平洋を結ぶ協力関係の良きお手本になります。

文章の選定と著作解題について述べます。日本語及び国語学は，東京大学の築島裕教授が担当しました。日本文学では広島大学の稲賀敬二教授，政治学では早稲田大学の秋元律郎教授と東京都立大学の升味準之輔教授，歴史学ではイェール大学のJohn W. Hall教授，社会人類学と社会学では，ミシガン大学のRichard K. Beardsley教授と東京教育大学の森岡清美教授が担当しました。日本語・国語学篇の編集には東京教育大学の小松英雄教授が加わり，歴史学篇では京都大学の本山幸彦教授が加わりました。（以下，略）

続いて，注釈本である*Readings in Japanese Language and Linguistics, Part II*の書誌情報を述べる。

副題：Part II annotations
編者：Joseph K. Yamagiwa
抜粋文献の著作解題：Hiroshi Tsukishima
出版社：The University of Michigan Press
出版年：1965
登録番号：Library of Congress Catalog No. 65-13047
組み方：横組み，左開き
目次：Part Iとほぼ同様

続いて，注釈本の序文（editor's foreword）に触れる。

（序文の第１段落で，Part Iで書かれた５巻全体の概要を繰り返し，第２段落でも同様に，対象とする学習者及び日本語能力，第３段落でも同様に本書の使い方に触れている。よって，第４段落以降について要約する。）

各巻の文章には日本語の難易度に高低差があります。日本語の話し言葉の基礎を十分に身に着けた学習者なら，難易度の程度が専門用語の多さと，古典日本語の形態の出現頻度によって決まることがわかるだろうと思います。幸いにも，日本の多くの研究者は現代日本語の文体で書いています。語彙にも書き言葉にも十分すぎるくらいの注釈を施しましたから，読解に必要なさまざまな手掛かりを発

見するに違いありません。

古典作品からの引用は古典日本語の文法を含んでいますから，すべて英語に翻訳しました。そうすれば，皆さんがこれまでの日本語訓練の間に慣れ親しんだ用語と衝突しそうな文法説明を減じることができます。英語への翻訳は，意訳ではなく逐語訳にしました。長い節を翻訳したときに，日本語と英語の間の対応関係がはっきりするからです。

本書の注釈はまず文章の著作解題から始めます。次いで，日本語の語や句・節の注釈を行いました（筆者注：見出し語→ローマ字あるいは音韻表記による読み方→英訳）。見出し語は文章に表記されている漢字と仮名を用いました。語に２通りの発音がある時には２つとも示しました。動詞は辞書形で示しましたが，文章の中で使われた活用形が有効であると判断すればその活用形を用いました。日本語の語や句をローマ字化するには修正ヘボン式（研究社の『*New Japanese-English Dictionary*』に使われている方式），あるいは音韻表記を利用しました。次の表は２つの方式の対応関係を表しています。

音韻表記	修正ヘボン式ローマ字表記
aa	ā
uu	ū
oo	ō
š	sh
č	ch
¢	ts
šš	ssh
čč	tch

（この後，仮名一覧のヘボン式表記・音韻表記が続くが，省略）

日本語のアクセントは伝統式に従います。語中の高いアクセントの拍は，「´」という記号を，高いアクセントが連続する最後の拍に付けて表しました。高いアクセント拍が第１拍の時には，その後に続く拍は中間か低いピッチで発音されます。高いアクセント拍が第１拍以外の拍に生じたら，第１拍は低アクセントで発音され，第２拍目以降は高いままです。アクセントの下がり目があれば，その拍まで高いままです。高いピッチを示す記号が付された拍に後続する拍は中間か低いピッチで発音されます。アクセントのない語（つまり下がり目がないもの）は，第１拍目が低いピッチで発音され，２拍目以降はいくらか高いピッチになります。

語の中で母音が連続し，その１つがアクセントを担う時には，音韻表記が便利です。つまり，ヘボン式ではアクセント型がはっきりと示せない場合には，ヘボン式の後ろの「　」の中に音韻表記することでアクセントを表示することができるのです（筆者注：「空気」＝kūki（ヘボン式）→kūuki（音韻））。なお，句のアクセントはイントネーションの推移を考慮しています。

日本語の書名には下線を付し，論文名の英訳は，下線を付さずに（　）または引用符で示しています。固有名詞の英語は，語頭を大文字で表しています。英語による説明文の中では，日本語の言葉にアクセントを付していません。

（以下は謝辞が続く。Part Ⅰと同じであるから省略する。）

上記の序文中の「著作解題」は，「本書収録論文等」の⑷では，次のように記されている。英語による原文をそのまま記載する。

Hašimoto Šiñkiči, “Kokugo oñiñ no heñseñ 國語音韻の變遷 (Historical changes in Japanese phonology),” in Kokugo oñiñ no keñkyuu 國語音韻の研究 (Studies in Japanese phonology)

[Hašimoto Šiñkiči Hakase čosakušuu 橋本進吉博士著作集 (The collected works of Dr. Hašimoto Šiñkiči), volume 4], Tookyoo, Iwanami šoteñ, 1950, pp. 51-103.

Hašimoto Šiñkiči, 1882-1945, professor of Japanese language at Tookyoo University, was one of the most distinguished scholars in his field. Known for the system of Japanese grammar which bears his name, he made his most significant contributions in the field of Japanese phonology. His studies dealing with the rediscovery of the special uses of kana in the Nara period and his study of the text of the Doctrina Christaõ printed by the Jesuit Mission Press at Amakusa deserve special attention.

The greatest progress which has taken place in recent years in Japanese phonology.

Hašimoto Šiñkiči is the scholar who through the adoption of a scientific standpoint built the foundations for research in this field. In "Historical changes in Japanese phonology" are recorded quite a few original discoveries which later came to be accepted by the academic world. Although Hašimoto Šiñkiči's work has been supplemented by later research on the part of other scholars, the present article contains little or nothing which has since been disproved.

３．教材として

Part Ⅰに収録の文章の一部は次の通りである。目次４の橋本進吉「國語音韻の變遷」からである。原文は縦書きで，旧仮名遣い・旧漢字体が使われている。Pp.25-76という長い文章の，28ページからの抜粋である。

音韻組織は同じ言語に於ても時代によつて變化する。前の時代に於て二つの違った音であつたものが音變化の結果後の時代に至つて一つの音となる事があり（イとヰは古くは別の音であつたのが，後には共にイの音となつて區別が失はれた），前代に一つの音であつたものが後代には二つの別の音にわかれる事もある（「うし」の「う」と「うま」の「う」は古くは同じウの音であつたが，「うま」の場合は後には「ンマ」の音に變じて，ウとンと二つの音になつた）。又，或音韻が後代に於ては全くかはつた音になるものもある（「ち」は古くはtiの音であつたが，後には現代の如きチの音になつた）。かやうに箇々の音の變化によつて，或は數を増し或は數を減じ，或は一の音が他の音になつて，前代とはちがつた音韻組織が生ずるのである。（Part I, p.28）

全52ページに及ぶ長い文章について，Part IIの注釈本に詳細な語彙表が掲載されている。その１つ１つに当たった上で，⑴ 専門用語の英訳，⑵ 句・節の英訳，に分けてそれらの一部を記すことにする。なお，数字は，原著のページ数と行数を表している。Part Iでは，ページの通し番号が25から本文が始まっているが，その25ページの右下に「五二」と書かれている。

⑴　専門用語の英訳

53.3	感動詞	interjection
	擬聲詞	onomatopoetic word
53.14	發音器官	vocal organs
54.9	音韻	sound, phoneme
54.10	音節	syllable
54.15	音韻體系	a phonological system

57.13　萬葉假名　Chinese characters used to transcribe Japanese sounds; - called Mañyoogana because they are used in the Mañyoošuu (compiled c. 759)

58.3	活用形	inflectional form

60.4　濁音　voiced sound
　清音　voiceless sound
60.9　助詞　particles
66.14　五十音圖　“the table of the fifty syllables,” first called goonzu
67.1　同行　the same column
　同段　the same row
68.9　支那古代音　ancient Chinese pronunciation
68.14　ハ行　the［ha］column of the Japanese syllabic table
　F　represented by［φ］
68.15　P音　the sound［p］
71.3　音韻表　systematic table of pronunciation of the Chinese characters
　韻鏡　a work consisting of 43 tables, each of which represents a phonetically related series of finals in Chinese
71.4　轉　the label for each the 43 tables of the Iīnkyoo; for details, see Bernhard Karlgren's Compendium of Phonetics in Ancient and Archic Chinese
　等位　each of the four divisions in each table of the Iīnkyoo showing vowel differences; each divisions is further divided into four lines giving the four tones of ancient Chinese
71.9　直音　the most frequently found syllables consisting of a consonant and a vowel, such as ta, mi, so
　拗音　labialized or palatalized syllables, such as kwa,kwo, kya, kyu, kyo
71.13　開音　open syllable
71.14　中舌母音　central vowels
72.1　ワ行拗音　syllables in which a［w］is inserted between the initial consonant and vowel
72.2　ヤ行拗音　syllables in which a［y］is inserted between the initial consonant and vowel, a palatalized syllable
　短音　a syllable with a short vowel
　長音　a syllable with a long vowel
73.4　促音　assimilated syllables, such as initial p, t, and k in rippa, tatte, and kekkoo
77.3　轉音　ablaut, systematic variation of (root) vowels in related words
78.14　いろは歌　the title of a poem in 47 syllables composed shortly after the Ame¢u¢i. In the Ame¢u¢i, there were both［e］and［ye］; their merging is evidenced in the Irohauta
87.5　呉音　the Go pronunciation of a Chinese characters; - brought into Japanese in ancient times from mid-eastern Chinese dialect
　漢音　the kan pronunciation of Chinese characters; - brought into Japanese from the dialects of Rakuyoo 洛陽 and ch'ang-an (Čooań 長安) during the 8th and 9th centuries
88.8　宋音　the pronunciation of a Chinese character brought into Japanese from the 11th to 13th centuries
89.7　長拗音　syllables with a semivowel after the consonant and a long or doubled vowels, such as kyaa, kyuu, čaa, etc.
89.11　開口　the opening of the mouth
90.1　開音　open sound; - pronounced with oral passage relatively open
　合音　closed sound with oral passage relatively closed

(2)　句・節の英訳

52.13　或限られた數　a certain limited number
52.3　一定數以外の　other than the given number
53.5　用ゐる事なく　there is no occasion to use

53.6　英語のstickをステッキとした
changed the English word “stick” into sutekki
53.7　夫々一を以て他に代へ難い in each case to be hard to substitute one for others
53.7　獨自の用ゐ場所　its own place of use
53.11　更に小さな　still smaller
53.13　耳に聞いた上から　on the basis of hearing
53.14　運動の上からも　on the basis of the movements also
54.10　右の理由によつて　for the reason mentioned before
54.13　同様である故　because it is similar
55.1　音韻組織は國語の違ひによつて違つているばかりでなく
　The phonological systems differ not only because of differences between languages, but also
55.5　一種の特別の音　a special kind of sound
55.7　時代によつて變化する　to change in accordance with the period
55.8　その時代に至つて　in a later period
55.13　數を增す　to increase in number
　數を減ずる　to decrease in number
55.15　既述の如く　as (I) have already mentioned
56.2　とかいふやうなきまり　rules such as
56.5　複合語又は連語における音轉化の法則
the laws of sound change in compound words or phrases
56.7　原語の違ひによつて異る　to differ according to the differences between languages
56.11　述べるに當つて　in explaining
57.1　時期を劃する　to demarcate the periods
　便宜から出たものである　to come about as a matter of convenience
57.11　それ以前の時代に遡るの外無いのである　one cannot help going back to the preceding age; there is no other way than to go back to the preceding periods
59.12　音そのものを指す　to poin to the sound itself
59.15　類が別にある　there is a group that existed separately
63.7　語によつてその何れの類を用ゐるのかがきまつている
　Which kind (of Mañyoogana) is to be used is fixed depending on the word
63.11　全體の數から見れば　viewing (these) from the total
66.8　如何なる他の音と相通じて用ゐられるか　with what other sounds they are equivalen in use
69.5　Fであつたと認むべき根據がある
there are grounds that make one recognize that it was F
69.8　如何なる位置にあつても　whatever position it is located in
69.15　ザ行の假名にあたる諸音の子音はサ行にあたる諸音と同じ子音の有聲音であろう
the consonants of the sounds (i.e., syllables) that are represented by the kana in the［za］column probably are the voiced sounds of the same consonants in the［sa］column i.e., ザジズゼゾ are the voiced equivalents of サシスセソ
70.7　子音の次に母音がついて成立つ諸音
various sounds which consist of a consonant followed by a vowel
71.6　初の子音と後の母音との間に入つた母音　a vowel placed between the initial consonant and the final vowel
72.4　エ段は-eに對して-əi又は-əeであろうか　as for the e-row, (it was) possibly［əi］or

［əe］for［e］
74.4　その中の一音が他の同音に變ずる
one of them changed to become identical in sound with (one of) the others
74.7　時代が下ると共に with the passage of time
74.9　さう見れば見得る例は無いでも無いのである　viewed in this matter, there are some examples that could be found (it isn't that some examples cannot be found)
77.5　エ段の假名にあたる音がア段にあたる音に轉ずる　sounds corresponding to the kana of the［e］row change into sounds corresponding to the kana of the［a］row.
86.6　鼻音を帶びたウ　a slightly nasalized［u］
92.11　ンがm音であったものはマ行音になる
the ń that was originally［m］becomes an［m］column sound; for example, the character 三 (sañ) which was at this time originally pronounced sañ was sam in Chinese and in Sino-Japanese pronunciation was rendered sam or samu; therefore, sam and i formed the compound sammi
93.12　ン或は入聲tの次のア行ヤ行ワ行音がナ行音又はマ行音或はタ行音に變ずる
The vowel, ya-, and wa- column syllables that come after an ñ or after a fourth tone syllable endin in -t change into a na-, -ma- or ta column syllable; -as in oñnai, sañmi, and ketteki among the examples given above

４．本書への言及

高木（1973）は上級日本語の教育について次のように述べている。

……以上のような学生（筆者注：話し言葉の習得と書き言葉の習得のバランスが悪い学生）に対して，指導者の側に，どのような教材が用意されているだろうか。現在，日本語教育を行っている機関で用意しているのは先にも述べた通り，中級までの教科書のように思う。ということは上級においては，なまのものを使うという現状にあると考えられる。外国人のために書いた教科書ではなく，日本人が自分の研究をまとめた研究書，あるいは小説・歴史書・論評新聞・雑誌の記事などがそのまま教材となるのである」（pp.20-21）

とした上で，

こういういわゆる「生のもの」を教材としえたものに，ミシガン大学でヤマギワ氏の編集されたものがある。政治・経済・歴史・文学の各分野の専門導入のための教科書である。日本人の専門家によって書かれた論文や作品に単語表がつけてあるが，専門家となる学生が手がけるものとしては恰好のものであろう。この種の専門導入書を使って，どう能率的に教えるか，どういう方法で迫るかは，私たち日本語教師に課された重要な課題の一つであると同時に，こういう教科書の出版は，今後早急に行わなければならないもののひとつである。（p.21）

本書を含む５巻のReadingsを好意的に受け止めている。それらを用いた指導法を模索する必要があると説いている。

木村（1972）は，「4.2　現在使われている読解用教科書」の項に以下の教科書が列挙されている（pp. 40-54）。

⑴　長沼直兄『標準日本語読本』巻１～巻８
⑵　国際学友会日本語学校『日本語読本』巻１～巻５
⑶　国際基督教大学日本語科『Modern Japanese for University Students』Part I, II, III
⑷　Hibett, H. & Itasaka Gen『Modern

Japanese, A Basic Reader 日本現代文読本』

(5) 早稲田大学語学教育研究所『外国学生用日本語教科書』初級・中級

(6) その他の教科書

ア　米加12大学連合日本研究センター『Intermediate Spoken Japanese. Integrated Spoken Japanese』I, II, III

イ　小川健二『日本語　New Intensive Japanese』

ウ　大阪外国語大学研究留学生別科『Intermediate Japanese』2 vols

（中略）

コ　Yamagiwa, Joseph K. (ed.)

Readings in Japanese Language and Linguistics

Readings in Japanese Political Science

Readings in Japanese Literature, University of Michigan Press, 1965

本書の内容に関する記述はない。

吉岡（2008）では，「Chapter 4 資料　戦後の日本語教材」の年表の中に本書が取り上げられている。

通し番号35　1965年　Readings in Japanese Language and Linguistics pt.1-2

通し番号36　1965年　Readings in Japanese Literature pt.1-2

通し番号37　1965年　Readings in Japanese Political Science pt.1-2

通し番号45　1966年　Readings in Japanese History pt.1-2

通し番号46　1966年　Readings in Japanese Social Anthropology and Sociology pt.1-2

（以上，pp.205-206）

本書の内容に関する記述はない。

池田（2018）はBernard Bloch研究の流れの中で本書編者のYamagiwaに言及している。Yamagiwaが1942年に出版した*Modern Conversational Japanese*の意義を述べた後，1965年出版の本書に触れて，「このYamagiwaの偉大な業績はこれまでほとんど知られていない」とし，本書が「非常に有益な教材であったろう」と結んでいる。

5．考察

5.1. 文章の選定について

まず，文章の選定について述べる。Part Iの序文で，「注意したのは，それぞれの学術領域の下位分野をもれなく拾い上げることでした。本書の読者は，収録された文章が各分野の広範で多様なものであることに気づかれることと思います」と書かれている。

これを検証するために，本書から約20年後に刊行された『日本の言語学』全８巻と比較してみる（筆者注：第８巻は索引につき省略）。これは，編者（服部氏・川本氏・柴田氏）が重要だと判断した，明治時代以降の論文を収録している。松下大三郎の論文（明治42年）や神保格の論文（大正11年），佐久間鼎の論文（昭和15年）も掲載されている。両書の刊行年に20年の開きがあるとはいえ，選定の対象とした期間に大差はないと考えてよかろう。下は『日本の言語学』各巻の名称と構成を示している。

第１巻言語の本質と機能（コミュニケーション，言語本質論，言語研究法，言語の場・敬語，言語と社会，文章・文体，文字・表記）

第２巻音韻（特質論，音声と音韻，アクセント，イントネーションなど）

第３巻文法I（文法総論，文の定義，陳述，文の分類，文の構造，総主・提題・「は」・「が」）

第４巻文法II（語の定義，語の分類（総論），語の分類（各論），活用，語の構成，方言文法）

第５巻意味・語彙（意味の理論，意味の体系，意味の変遷，語彙の構造・用法，命名論）

第６巻方言（総論，方言区画論，言語史と方

言，方言と標準語）
第７巻言語史（音韻史に関する研究，過去の音韻共時態に関する研究，音韻交替に関する研究，文字言語史に関する研究，文法史に関する研究，日本語の母音調和に関する研究，方言の比較による史的研究，日本語系統論，中古シナ語の研究）

では，本書に選定された文章（『国語学辞典』からの抜粋のため，(1)～(3)を除く）は，上のどの巻に所属するだろうか。

第１巻：(8)時枝
第２巻：(7)金田一，
第３巻：(9)橋本，
第４巻：⑽水谷，⑾石垣，⑿松尾，
第５巻：
第６巻：⒆東條，⒇国語研
第７巻：(4)橋本，(5)有坂，(6)亀井，⒀大野，⒂築島，⒃春日，⒄金兒・中田
該当せず：⒁上田・橋本，⒅湯澤，㉑土井，㉒時枝

両書を比べると，第７巻「言語史」に本書選定の文章が集中していることがわかる。また，第５巻「意味・語彙」に相当する著作が選定されなかったことも明らかである。その点で，序文の「それぞれの学術領域の下位分野をもれなく拾い上げる」という意図が十分に実現されたとは言えないのではなかろうか。

5.2. 日本語学習者のレディネス

次に，序文で「本書は，よく整備された大学の日本語プログラムで２～３年の訓練を受けた学習者を想定しています」と述べ，本書の対象とする学習者のレディネスに触れている。ここでいう「２～３年の訓練」とは，どのような学習内容なのだろうか。

これについて，立松（1978）は次のように述べている。

センター（筆者注：アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター）の午前中の授業が，ISJ I. II（筆者注：*Integrated Spoken Japanese* I. II）を中心とする話し言葉の教育に重点をおくのに対して，午後の授業は学生の読解力を向上させるための読解授業と，ビデオを利用したききとり授業とに分けられている。センターの最初の読解教材として我々は1973－74年度より，三省堂の高等学校用教科書，「新倫理・社会」及び「新政治・経済」を使用してきた。この教材を使って読解教育を受ける学生達はエレノア・ジョーデン著“*Beginning Japanese*,”ヒベット・イタサカ著「現代日本語読本」などを用い２年以上，アメリカやカナダで日本語を学んできた学生達であり，中には種々の古典や専門書を読んできたものもある。

ここでいう『*Beginning Japanese*』2 vols.とは，入門→初級→中級前期の日本語習得を目的とした教科書で，本書刊行に先立つ1961年（vol. 1）と1963年（vol. 2）に出版されている。中級日本語に相当する文法項目には，使役や受け身，逆接の「ながら」，形容詞の丁寧形「広うございます」などが挙げられる。なお，この教科書では日本語文がローマ字で書かれているため，別に漢字かな混じり版が作成されている。

ヒベット・イタサカの「現代日本語読本」は初級日本語を終えた学習者が，中級から上級に至る書き言葉を習得するために作成された教科書である。国際交流基金（1983）によれば，語彙数は約3,300，漢字数は1,428字で，その中には89の旧字体が含まれている。全60課からなる。「16. 日本の地理」，「17. 日本の歴史」，「33. 遺書（一）芥川龍之介「遺書」」，「40. 私の個人主義（一）夏目漱石「私の個人主義」，「53. 文化財保護志賀直哉「私の信

条」」（筆者注：数字は課数）などが収録されている。次は, 33. 遺書（一）の冒頭である。教科書では手書きによる縦書きのものになっている。

第三十三課　遺書（その一）
誰もまだ自殺者自身の心理をありのままに書いた者はない。それは自殺者の自尊心や或るいは彼自身に対する心理的興味の不足によるものであろう。僕は君に送るこの最後の手紙の中ではっきりこの心理を伝えたいと思っている。（以下略）

上の芥川の著述を見れば，本書に選定された文章との距離が測れるだろう。その距離はそれほど長いものではなく，丁寧な注釈と適当な辞書があれば理解が可能である。外国語教授法の観点から言えば，典型的な文法訳読法によって読解力を高める指導法をとっている。フランス文学を志す学生が，フランス語の初級文法習得後にボードレールやプルーストの原文に挑戦するようなものであろうか。

5.3. ローマ字表記とアクセントの表示

Part IIの序文には,「日本語の語や句をローマ字化するには修正ヘボン式（研究社の『*New Japanese-English Dictionary*』に使われている方式），あるいは音韻表記を利用しました」と記されている。長母音の表記に苦心したことがうかがえる。ヘボン式では，長母音は母音の上に「－」を付す。「そうです」は［sō desu］と書く。Yamagiwaのいう音韻表記を使えば，［soo desu］と書ける。音韻表記の利点は，序文が述べているように，［so］がアクセント核を担った場合に，下がり目符号「´」を付すことができることである。

日本語をローマ字化する際にヘボン式か訓令式か選択しなければならない。どちらにも得失がある。「ち」「つ」はヘボン式の［chi］，［tsu］を用いれば，［t］とは異なる音であることが視覚的に捉えられる。動詞「待つ」の辞書形から否定形から得たい時には，［matu］→［matanai］と訓令式を用いたほうが，［matsu］→［matanai］のようなヘボン式より日本語学習者には理解されやすい。言語学的な理論に依拠しても解決策は見つからない。現場の日本語教員が知恵を絞るほかあるまい。

Part IIの注釈で優れた見識が示されているのは，語などのアクセントを表示したことである。表示の原則が序文に記されている。

日本語のアクセントは伝統式に従います。語中の高いアクセントの拍は,「´」という記号を，高いアクセントが連続する最後の拍に付けました。高いアクセント拍が第１拍の時には，その後に続く拍は中間か低いピッチで発音されます。高いアクセント拍が第１拍以外の拍に生じたら，第１拍は低アクセントで発音され，第２拍目以降は高いままです。アクセントの下がり目があれば，その拍まで高いままです。高いピッチを示す記号が付された拍に後続する拍は中間か低いピッチで発音されます。アクセントのない語（つまり下がり目がないもの）は，第１拍目が低いピッチで発音され，２拍目以降はいくらか高いピッチになります。

きわめて正統なアクセント論と表示方法である。語中にアクセント核がある時には,「限られる　kagiraréru」,「しっかりと　šikkári to」のように表される。語末にアクセント核がある尾高型の語の場合には,「歌　utá」のように書かれている。平板式では,「外国語 gaikokugo」のように，アクセント核を示す符号を付さない。複合語は,「新潟縣niigatá-

ken」,「時代的變化　jidaiteki héñka」,「標準的發音　hyoojuñteki haȼuoñ」のように表している。

ただし，間違ったアクセント表示も見られる。「濁音　dakuoñ」「清音　seioñ」が標準的なアクセント表示である（『NHK日本語発音アクセント新辞典』による）のに対して，「直音　čokuoñ」「拗音　yooon̄」は標準的ではない。「直音」は「く」にアクセント核があり,「拗音」は「よ」にアクセント核がある，起伏式のアクセントである。「濁音」「清音」のアクセントに引っ張られたためであるかもしれない。

日本語教科書でアクセントを付けて語を提示することは，アメリカではBloch & Jorden（1945）に始まる。その後，Jorden（1961, 1963）に引き継がれ，本書もこれを踏襲している。よき伝統と言えるだろう。

5.5. 英訳

本稿３節で引用した，専門語，句・節の英訳は完璧である。橋本進吉の日本語音韻の変遷に関する文章には，多くの音声・音韻の専門用語が用いられているが，当時の国語学界の定義に沿ったものとなっている。また,句・節の英訳は，Part IIの序文で「英語への翻訳は，意訳ではなく逐語訳にしました。長い節を翻訳したときに，日本語と英語の間の対応関係がはっきりするからです」と述べている通りに書かれている。「57.11　それ以前の時代に遡るの外無いのである　one cannot help going back to the preceding age; there is no other way than to go back to the preceding periods」では，セミコロン以下の部分がそうである。また,「74.9　さう見れば見得る例は無いでも無いのである　viewed in this matter, there are some examples that could be found (it isn't that some examples cannot be found)」では,（　　）の中が逐語訳であり，確かに日本語と英語の対応関係が明確である。

６．おわりに

本書（Part I）及び注釈本（Part II）の全貌を示すことはとうていできないが，その一端を明らかにすることはできたのではないかと思う。1965年というと,日本は経済成長の真っただ中にある。国内の大学での日本語教育は開発途上にあった。しかし，アメリカでは外国語としての日本語教育は，本書を必要とする段階にさしかかっていたのである。

本論の副題を「専門日本語教育の階梯」とした。日本語教員であるYamagiwaが専門領域の教員と協働して本書を作成したことは，もっと知られるべき出来事でないだろうか。本書及び注釈本が，現代の専門日本語教育の里程標になることを願って，本稿を終える。

参考文献

池田菜採子（2018）「Bernard Blochの日本語研究を支えた日系人たち」,『日本語・日本文化論集』第25号．名古屋大学国際言語センター.

NHK放送文化研究所編（2016）『NHK日本語発音アクセント新辞典』，NHK出版.

木村宗男（1972）「読解の指導方法」，文化庁『日本語教育指導参考書３　日本語教授法の諸問題』，大蔵省印刷局，pp. 1 -59.

高木きよ子（1973）「日本語教育の最終目標－日本研究の専門家のために－」,『日本語教育』22号，外国人のための日本語教育学会，pp. 17-26.

国語学会編（1955）『国語学辞典』，東京堂.

国際交流基金編（1983）『日本語教科書ガイド』,（株）北星堂書店．河原崎幹夫・吉岡武時・吉岡英幸の３氏が執筆.

Jorden, E. H.（1961, 1963）*Beginning Japanese*, 2 vols. Tuttle.

武田珂代子（2018）『太平洋戦争日本語諜報戦』,ちくま新書.

立松喜久子（1978）「読解の基礎教育」,『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀

要』１（特集　日本研究センターにおける日本語教育），アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター.

パッシン，Ｈ（1981）『米陸軍日本語学校』，ＴＢＳブリタニカ．2020年４月に，ちくま学芸文庫として再版．訳者はいずれも加瀬英明氏.

服部四郎・川本茂雄・柴田武編（1985）『日本の言語学』第８巻（総索引），大修館.

Bloch, B & E. H. Jorden（1945）*Spoken Japanese Book One*. H Holt.

吉岡英幸編著（2008）『徹底ガイド日本語教材 Complete Guide to Japanese-Language Teaching Materials』，（株）凡人社.